

城内から角間へ

37期 山本 英男

あれは92年の春のことでした。

ご縁がないとばかり思い込んでいた^茂に登れて（現役当時も^茂PWはあったけれど、ビラに名前を書くのは憚られたものでした。）、私は意気揚々と部室へひけらかしに行きました。そんな話でも持っていなければ、卒後ン年の部室は、やはり数居の高い所でした。

その部室に座っていたのが、当時1回生の37期山本君。まだ疑うことを知らない初々しい彼を強引に誘い、エリーに行きました。（だって屋間？だったし、まだ年長児を抱える身としては、夜飲みにお誘い直しという訳にもいきませんでして…）

あの時のたかがコーヒー一杯のために、O Bになってからまで原稿をせまられるなんて…。くれぐれも、「お婆さんの親切」には気をつけましょう！

楽しいお手紙ありがとうございます。いつものことながら、返事が遅くなってすいません。

11月23、24日と高三郎へ歩荷トレに行く予定だったのですが、さすがに一人だったからか、やる気がないからか、寝過ごしてしまいました。24日に日帰りで登ってきましたが、体力不足で頂上まで行くのはあきらめ、ガレ場の手前で引き返してきました。山頂近くはこの時期でも、灌木のブッシュが激しく、なかなかしんどいものがありました。ベルクハイムは早くもカメ虫の住処となり、とても近づける雰囲気ではありませんでした。

恐らくいくつかは誤字脱字があると思いますが、許して下さい。また、この前の小屋作業に関しては、喘息がひどく、あまりいい思い出となっていないので、部室の移動のことを書くことにします。 11月30日

部室が城内から角間へ移ってから、もう3年目となった。僕達の代が城内の教養部で1年半行を受けた最後の学年となった。昔（僕らが現役だった頃）ではあたりまえだったことが、今ではそうではないことがいくつかあるだろう、また、形を変えて残っていることや変わっていないことなどあるのではと思われる。ここでは、無け無しの記憶を掘り起こして、城内から角間へ部室が移って部の活動がどのように変わったのか、くだらないことを中心に探って行こうと思います。

買い出し

城内に部室があった頃と今と大きく変わったこととして、まゆる、味袋関係はすべてここで揃えていた。特に安いというわけではなかったが、世界のダイヤモンドというだけあって怪しい食べ物はず、山行の買い出しということが頭に浮かぶ。以前はみんなで歩いて近江町市場へ買い出しに行っていた。これは、かなり前のOBの方々の時代から恐らく変わっていないことでしょう。カレーやシチューのルーや行動食、塩、胡椒など、いわゆる味袋関係は無数にある。変な差し入れはたいていここのものだった。そして、肉は天狗、メタロウ関係はライフガード、野菜は、……、店の名前は忘れたが、ばら売りのしてくれるお店だったと思う。そしてもう一つ忘れてならないのが、近江町市場入り口のパン屋であろう。（ここの名前は忘れました。）山行に持っていくパンは、ほとんど、偽リッチパンというパンで、なかなかうまかった。

とにかく買い出し=近江町という構図が当然のこととして当時の部員の頭の中にはあったのでは。

今は、ほとんどのものをジャスコで仕入れているというのが現状でしょう。また、買い出しには地理的なことからもちろん、車は不可欠なものとなっている。だから、車を持っている人間が一人もいないパーティはどこか別のパーティに時間を合わさなければならない。

練習

練習する場所が大学のキャンパスであるということは変わらないが、練習方法は大きく

変化していると思う。城内では、きつい坂がたくさんあるので、それを使ってよくダッシュをしたが、角間の坂は緩やかなので、使いづらい。

また、雨の日は教養の校舎を走ったりしていたけど、角間ではどうしているのか、はっきり言ってよくわからない。というのも、自分が現役の頃、雨の日はほとんど部活にいかなかったからで、この場をお借りして、謝らせていただきます。どうもすみません。

そういえば、城内の頃は、部室の前にある白鳥路へ通じるルートがあって、そこから卯立山のソフトボール場へよく行ったのを覚えている。また、冬には兼六中学校？にサッカーをしに行ったりもした。また、自分が2年生の後期は、城内からほとんどのものが移転し、体育館やほかの部の部室も使いたい放題であった。その反面、何気ない寂しさが漂っていたような気もする。その頃、テニス部の部室に泊り込んでいる人がいて、うわさにもなったりした。

城内の部室は、一年中じめじめしたところで、夏は蚊がすごく、冬は冬でストーブが壊れたときなど寒くて仕方がなかった。初めて部室に行ったときの印象は暗く、陰気臭いところだと思ったのが正直な気持ちだった。部室のことにに関して、ベルクハイムにかかれていると思うが、いったいどれくらいの代があそこを使っていたのだろうか。汚いのはは確かだが、その割にはあれだけ狭いところに山行に使われる道具すべてがおいてあり、使い勝手が、今と比べるとよかったのではないかな。

部室の移動

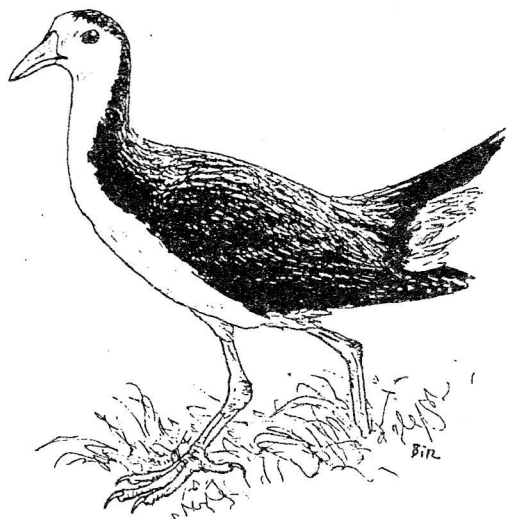
正式に角間の部室を使うようになったのは、僕らが3年になる頃、だから、94年の4月頃だったと思う。当時、部室が移動するというに伴って、角間での部室の割り当てはどうなるんだ、ということが話題になっていたが、一つ上の代の先輩方のおかげで二つの倉庫を借りることができた。城内にいた頃よりも、かえって使える場所は広がった。僕は部室の移動自体にはあまり関わらなかったからか、引越しのことはほとんど覚えていない。本来なら、今、ワングルと山岳部が使っている部室が体育会系のほとんどのサークルで使わなければならないはずだったが、なぜか、今でも、ほかのサークルはあそこを使っていない。だから、ワングルがいいように使っ

ている。

僕ら工学部の人間は、部室が角間に移って、とにかく、練習に行くのはかなりきつくなった。工学部生で車を持っている人間が、その頃、誰もおらず、さらに最悪なことに、バイクも僕は持っていなかったの、練習の日は自転車で行くより仕方がなかった。

城内のように交通の便がいいところなら、寒い冬の日や雨の日には、バスですぐに行けるのだが、角間行のバスは本数も少ないし、乗ろうとしても、小立野から旭町の方へ歩いて降りなければならず、「ああ、練習に行かなくちゃ。」と思いつつ、家でゴロゴロするという日が結構あった。

角間と城内という、二つの部室を過ごした数少ない学年の目からみた雑感を書いてみましたが、早くもモウロクしたのか、結構忘れたことがありました。山行にまつわる思い出と比べたら、インパクトの強いものではないと思いますが、こうやって振り返ると、やっぱり、城内の部室は何かとうまくまとめられていてよかったなあと、実感してしまいました。



昨夏、同期横井さんへの追悼文を書いていた時、ついこの間元気に同期会を仕切ってくれていたのに……の悲しみの蔭で、また別の心の痛みを感じていました。それは、すでに逝った二人の仲間「高村さん」「比田井さん」に対して、追悼文集を作らないまま来てしまったことでした。

確かにあの当時、まだ社会へ船出して日も浅いそんな時に、まさかこんなことになるなんて……御家族とは比べものになりませんが、私達も大きなショックを受けました。それこそ、言葉にならない……「追悼文集を作ろう」の声が上げられない程の打撃を受けました。また、本当に自分のことだけで精一杯、前を見ているしかない時期でもありました。

しかし、それから日が流れ、作れないこともなかったのに、そのままで来てしまったことは怠慢としかいいようがありません。一生懸命生きてこられたご家族にも、申し訳ないことをしてしまいました。

そんな呵責をかかえたまま、また日は過ぎて迎えた同期会。比田井さんから、バレー部の追悼集を見せていただき、さらに強まってしまった胸のうずき。聞けば、一部の仲間うちでは追悼集を作ろうという話はあって、佐野さんが責任者になっていたとのこと。そんな……人選ミスだね。

だって、忠篤さんとは無二の親友だった佐野さんだもの。彼のことを思い出すだけでウルウルになって仕事にならんわね。ええ、私彼とは二夏をスタクカムウシュベで過ごした仲ですから、わかりますわよ。そんなのは、やっぱり、大胆かつ細心。温厚かつ冷徹。原稿を集めるためには、手段を選ばぬキャラクターじゃなくちゃ。

だから言ったのです。「手伝ってあげるわ。だから、同期会報告、ちゃんと書いてね。」

ともあれ、そんな経緯でプロジェクトはようやく発進することになりました。遅れたお詫びに、少しは編集方針をたててと、佐野さんと協議しているのですが、いわゆるお悔やみではなく、ご家族へのエールになるものかと考えています。

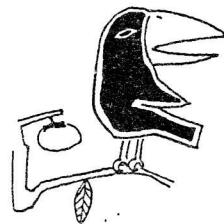
お父さんが、その時どんなことを言い、どんなことに笑い、どんなことに涙していたか……。皆の心に残っているお父さんを書いてもらい、そんなふうに皆の心に懐かしく残っていることをどうか励みにして……と、これから原稿依頼を行う予定です。

そう方針をたてたところで、編集長は考えました。卒業してからあまりに日が経っていて、思いおこすのがかなり難しい。それに卒業してからの高村さん、比田井さんがどうしていたのか、今ご家族がどこまで受け止められるようになっているのか、それがわからないと、ただでさえ重いワッゲルOBの筆は動かないかも。

そこで、本来なら周りからまずお慰めするのが筋というものでしたがあえて、千佳子さん、澄恵さんから思い出を語っていただくことにしました。幸いに、強く生きておいでたお二人はこんな失礼なお願いを受けて下さいました。

この会報に原稿依頼の同封されている方々はどうか以上の趣旨をご理解のうえ、ご協力をお願いします。

また、かれらとのご縁がなかったOB諸氏におかれましては、この機会にご冥福を祈っていただければ幸いです。



15期 高村 千佳子

まず、えい君こと、夫高村 栄一の卒業後から、私と出会う前まで…。

昭和50年4月に、川崎重工業ディーゼル設計の開発部門に配属されましたが、ディーゼルの景気が悪く、すぐ設計の方に転籍になったようです。入社して半年は、毎月金沢に帰省していたそうです。お母さんの話では、ほとんど外出していたそうで、学生時代の彼女に会っていたらしいですが…。

入社してから山にはよく登っていたようです。六甲山が近くにありますが、六甲山縦走（須磨一宝塚 約55km）も楽しんでいたそうです。

ここからが私の知っているえい君です。昭和52年のいつ頃だったか、「スケッチ会」という、写生したり、美術館に行ったり、版画をしたりするサークルに、別々の友人を通じて参加した時…それが初めての出会いでした。次の会の時には私が会計で、会場費集めを担当し、たまたま「高村君」と名前を覚えていたことが、彼にはすごく嬉しかったそうです。それから何となく話しやすくなっていきました。

同じ会社でもビルは違っていたのですが、私と同じビルに彼の友達がいました。ある時、その友達に彼が山行きの日程を持ってきて、余分があるからと私にも渡してくれました。私もまあ貰っておいてもいいかな程度で受け取りましたが、実に奇麗にスケジュールなどが書かれていて、意外な面を見たような気がしたことを覚えています。他にもカルタ大会に誘われたりしましたが、百人一首なんて殆ど忘れていたので恥をかくだけと思い、その気持ちの方が強くて断ってしまいました。

そんなふうに、その頃は仕事も頑張っていました。山に登ったり、人形劇のサークルに参加したり、英会話に通ったりと、アフター5も

充実していたようです。

そうやって何度かサークルで顔を会わしているうちに、

「給料日の後の金曜日は、寮の夕食が無い日だから、一緒に食事をしませんか」

との電話がかかり、フルコースを御馳走になりました。（あれからは、フルコースを食べには全然連れていってもらっていないような…）

食事は三宮でしたが、帰りは「少し歩こうか」と神戸駅まで。さらに「もう少し歩こうか」と、結局私の家まで3時間歩かされ、へとへとに。でも、それから寮まで帰らなければならなかった彼の方が、もっと疲れただろうと思います。

その後、どこの山かは忘れましたが、彼が友達と二人で登山に行くことになり、彼の誕生日（3月17日）と同じ頃だったので、女の子のマスコットをフェルトで作ってプレゼントしました。登山の時にはちゃんとリュックにつけて、持っていったくれたそうです。そのお返しというプレゼントがなんと”警報ベル”でした。結構高張るし、重たいし…。毎日持ち歩いていれなくて、彼は不満のようでしたが…。そんなに心配してもらわなくても、誰も襲わないのに…と思いましたけど。

それからグループで山に行ったり、スケッチに行ったり、また仲間の結婚式の出し物の準備をしたり…と、大勢での行動が多かったように思います。まだまだ結婚なんてお互いに口に出してもいなくて、気楽に過ごしている時突然に、彼に岐阜工場の航空機部門への配転の話がありました。



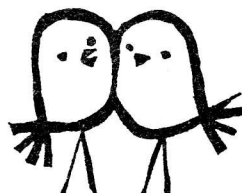
離れてもお付き合いを続けていくのかどうか、自分の気持ちを決めなければならなくなっていました。私の方は、母が昭和50年の10月に亡くなっており、父と兄との3人暮らしの家事を私が引き受けていましたので、遠くに行くことが考えられませんでした。父の方も頑として神戸からは出してくれそうもありませんでしたし、父の顔を見ていたら寂しそうで何も言えませんでした。結婚の話まで進んではいなかったこともあり、私は今がお別れ時なのだ、自分さえ彼の事を諦めればいいのだと自分に言いかけました。

彼に「神戸の高村君ならついていけるけれど、岐阜の高村君にはついていけない」ようなことを言いました。そうしたら、彼は配転の話を断ってしまいました。もちろん何度も上司に説得されていましたが、彼の意志は強く、頑張ってくれました。ちなみにいつも、私のプレゼントしたマスコットを胸のポケットにしのばせてくれたそうです。そんな彼を見てみると、こんな私の為に自分の出世も捨てて神戸に残ってくれた彼を本当に尊敬し、ついていこうと思いました。ですから、何か月か後に明石工場へ配転が決まり、結婚を申し込まれた時には、もう私の心は決まっていたので、その場でお返事することができました。

新居を探すのがまた一苦勞でした。入社5年以上の人は社宅に入居できるのですが、丁度5年目でしたので、民間の賃貸を探さなければならいけませんでした。

西は垂水から北は鈴蘭台まで、電話帳で不動産屋を調べ、見せてもらい、1件1件間取図を書き留めていくので時間がかかりました。感心するやら、もうここらへんで決めてほしいという気持ちやら…20-30件は見たように思います。鈴蘭台にやっと決まった時には、嬉しいよりへなへなと感じてした。

そうやって苦勞して見つけた家も、半年後には社宅に入居できることになり垂水の社宅に転居。さらにお正月に金沢へ帰省した時に、高村



の両親から早く同居したいとの話があり、また年明けから家探しをするはめになってしまいました。今度はたまたま早く思うような家が見つかったというか、彼の仕事が忙しくなりつつありそんなにこだわる時間もなかったというか、最初の大変さに比べればそんなに苦勞もなしにスムーズに決まりました。ですから昭和54年6月に結婚して入った鈴蘭台から、10月には垂水の社宅、翌年の6月には明石の少し西の土山まで、1年の間に3回も引っ越したことになります。

同居の話を聞いた時には、私の方はもう少し二人で暮らしたく思っていました。しかし彼は父が40歳の時の子供で「少しでも早く自分達で面倒をみてあげたい」と涙しながら話したので、両親思いな彼の姿に、同意しました。

(自分の方が先に亡くなるなんて、まさかその時には考えもしなかったことでした。)

いざ同居してみると、お二人共本当に優しく、食事の用意や家事をしていただきました。お父さんにもアイロン掛け等、よくしてもらいました。私は母が亡くなってから、いやその前から母も働いていたので、夕食の用意はずっとさせられてきました。ですから仕事から帰ってすぐ温かいご飯がいただけるなんて、最高でした。

土山に引っ越しする少し前に、赤ちゃんが出来たことがわかりました。仕事を続けながら引っ越しの準備をしていたので、ちょっと無理をしたのか切迫流産しそうにもなりましたが、12月無事にさおりが誕生しました。実家の父は私の結婚後半年くらいで再婚しており、私は産後も実家へ戻らず、高村の両親のお世話になりました。産休が明け、私は朝6時半頃に出勤して夕方6時頃に帰宅する生活に。その間、両親がさおりを見ていてくれて、夕食も出来ていました。

彼の方は、仕事ばかりで子育てというよりは、まるで可愛いおもちゃかベットのよう。普段の日はさおりの寝顔ばかりで、休日でも仕事だったりしましたから、たまに家に居られる時には、子供の顔をみるとほっとするのでしょうか。無茶苦茶可愛いがっていました。一生懸命遊んであげたりお風呂にいれたりして、まださおりが小さかったせいもあり、一度も叱った事は無かったように思います。

(そうやって私達をささえてくれたご両親は、彼が亡くなった後、今度は彼の姉の夫が亡くなりそちらへ移られました。もうお父さんは、彼と並んで卯辰山のお墓で眠っておいでます。)

明石工場では、工作課という、技術職と技能職の人が混合している職場にいました。現場の人が2交代でする仕事のプログラムを一人で受け持つというハードな仕事でした。もともとが公式から考え込むタイプの人だから、納得がいく迄に時間がかかりますし、人に頼まれたら断れない人だから、他の人より多く仕事を持たされたようです。

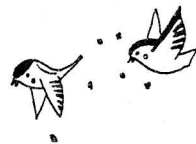
毎晩夜中の12時頃帰宅していました。終電が無くて、タクシーで帰ってきたこともよくありました。宴会のある時の方が帰宅が早かったほどです。残業代はせいぜい月に40時間くらいしかついていないようでした。彼にすれば、またここからやり直そうと必死だったのかもしれませんが。そんなに無理をしなくても、出世しなくても、楽しく暮らせたのに…と思います。

昭和58年のお正月には、加古川の宝殿駅から近くの山へ、初日の出を見に登りました。そのお正月休み明けからしばらくして風邪気味のようだと会社を休みました。近くの病院で点滴を打ってもらい、家で2-3日休んでいましたが、だんだん調子が悪くなり、別の病院に入院しました。脳脊髄膜炎と診断されました。脳に菌が入っているせいでしょうか、言う事も少しおかしくなり、住所を聞かれると、金沢の住所を言ったりしました。その前から相当疲れていたと

思うけれど、疲れたとも言わずに、毎晩遅くまで仕事仕事でした。そんな過労で抵抗力が落ちていると、風邪の菌にも負けてしまうのですね。風邪は万病の元といいますが、本当にその通りです。(皆さんもどうか無理をしないで下さい)意識不明のまま、旅立ってしまいました。

亡くなる前の年の秋頃、土山の近くにお墓の広告が出ていました。両親から、もう引き払ってしまった金沢にあるお墓では遠いから、近くに作ってはという話があり、彼とその場所を下見に行ってきました。彼が「こんな狭い所は嫌だ」と言ったので、そのままになっていました。

意識朦朧の中でも金沢の住所を口にしたり、彼は金沢を愛して、思い出一杯の土地なのでしょうね。ですから、お墓を神戸に移すことはできませんでした。たまにしかお参りには行けなけれど、大好きな金沢の地で安らかに眠っていることでしょう。



金沢のワングルのお友達に、たくさん会わせてくれました。松林さんと彼との三人で節ちゃんのお宅を訪問したり、松下さんと三人で食事をしたり。金沢に帰省した時、ワングルの集まりがあり、二人で参加させてもらったりしました。結婚式の招待メンバーを相談した時も、「ワングルの19人には全員に声を掛けるのだ」と、頑と言い張っていました。その時の彼の気持ち、ワングルの人達と接してみて納得できました。

15期会に声を掛けてもらった時、初めはとても辛くて参加できませんでしたが、思い切って参加してみたらとても楽しいひとときを過ごすことができました。こんな素晴らしい仲間を持っていた彼はしあわせだったなあと思います。そして私達親子に残していつてくれたことにも感謝しています。

苦しい時の神頼みではないけれど、さおりが病気になる時、テストの時、受験の時と、もう何回、何百回、彼に拜んで頼んだことでしょう。これからも、遠い空の上から見守ってくれていることを信じて、恥ずかしくないよう、精一杯歩み続けたいと思います。

ー彼の、短くも濃い生涯の歩みー

1952年3月17日 高村家の5番目めの長男として
誕生

1967年4月 金沢大付属高校入学

1970年4月 金沢大学入学 ワンゲル入部

1975年4月 川崎重工業㈱入社

1979年6月10日 結婚

1980年12月27日 長女 沙緒里誕生

1983年2月9日 永眠 30歳

今の私達親子の近況

私は相変わらず川崎重工業の神戸工場に勤務して、時代の波のパソコンでアップアップしながら、注文書や送付状を入力する毎日です。

沙緒里は兵庫高校の1年生になり、テニスに明け暮れています。

金沢へは、毎年、節ちゃんのお世話になり、お墓参りに行っています。

ワンゲルの15期会にもいつも声を掛けて頂いて、皆さんにお会いできるのを楽しみにしています。

「追悼文集を作るので、卒業してからの歩みを書いてほしい」というお手紙を頂いた時は、大変だな、書けるかな？と心配しました。でも、書いていくうちに、忘れかけていたことも思い出したり、いろいろなことを思いおこしながら書き終えることができました。心の整理にもなり、娘にこういう形で父親の事を伝えることが出来て、嬉しく思っています。

書く機会を与えて下さった節ちゃんを初め、ワンゲルの仲間の皆さんに心から感謝しています。

拙い文章で、きっと天国で彼が笑っている事でしょう…。

1996年11月

15期卒業記念アルバムの中から、比田井さんが佐野さんあてに書いた章を転載します。

佐野さんが、追悼文集をこれまで作れなかった件は、これにて不問。（すべて、編集長の独断）

15期卒業記念アルバムの中より

今思うと

きみと僕と奥名は

かなり似かよった人種であったような気がする。

似かよった性格、似かよった価値観を持っていたような気がする。

僕は きみとは楽な気持ちで話が

そして、つきあえたような気がする。

何か話をしなければとか

話の間がこわいとか

そんな気持ちを少しも持たないで。

似かよった者同士であったからだろう。

僕の短所が、きみの行動の中に見えた時

自分を非難するかわりに

きみを非難することがよくあった。（許せ。）

逆に きみの好意にかなり甘えさせて

もらったことを

感謝しています。

・求めよ。もっと自分に素直に。

・簡単に結論を出すな 何事も。

徹底的にやれ。

今思いつくきみへの忠告

同時に 自分への忠告。

学校における心の平安な場は

部室であり

大学生活における心の平安な場は

きみであった。

きみは確かに 他人のことに
気をつかってくれた。
しかし今年は 自分のことを
もっとみつめねばなくなるだろう。
そして 平安な場を 安息な場を
失った僕自身にも

いつまでも
友達でいてください。
絶えることなく。

山での友だちは
兄弟よりもなつかしい
ほんとうにそう思います

思い出が多すぎて

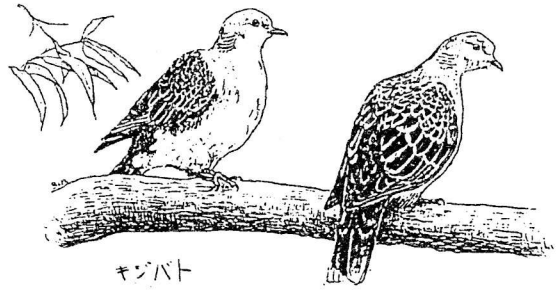
最初に君に会ったのは
そんな劇的なものではなく 自然に
ごく自然に 心の中に入ってきました。

一年の合宿の結団式
渡辺は覚えているが
君はさっぱり

白山の南麓で 食器を洗いながら
北島さんや 君と 冗談いったこと。
あそこから 君がなんとなく近い人間
わかりあえる人であるような気がしました。

合宿の思い出。多すぎます。
どうしても出発が遅れたこと。
薬師沢の五目寿司。
あの食欲は みんなが行動中に
キジ打ちにいった心の余裕と 水のきれいさから。
四年生と 女の人のこわさ。

合ワンの思い出 多すぎます。
カメラこわしたこと。バテたこと。
野坂さんのこと。



僕にはスキー合宿より 春山の方が
思い出に残っています。
C2 での強風の中でのブロック作り
金井と3人で隣り合わせて
寝たことなんか。

後立での天狗でぬれぬれになったこと。
白馬駅前の「コマクサ」で飲んだコーヒー。
僕がクラブをやめると言い、
何度も足を運んでくれた君。

牛小屋に泊まったこと。
脱衣所に泊まったこと。
「逆境のときこそ、人間の真価が問われる」
を知りました。

晩秋白山、白馬岳は、上級生として
余裕をもった山行であって
強烈な印象は残っていません。

愛知に行った時は
いろいろお世話になりました。

汚れちゃった悲しみは
なにのぞむなく ねがふなく
汚れちゃった悲しみは
倦怠のうちに死を夢む

汚れちゃった悲しみは
いたいたしくも 怖気づき
汚れちゃった悲しみは
なすところもなく日は暮れる――

不思議な縁

15期 比田井 澄恵

(文中の夫の名に、殿をつけたことを先にお断りします。そうしないと私の気持ちがすまないような気がしたものですから。)

今年(平成8年)は、忠篤殿が健在であれば結婚満20周年であるはず。なのに、何と忠篤殿の”7回忌”という節目の年にあたります。

この節目の年にちなみ、ワンゲル部15期会の方々の御好意で「追悼文集」なるものを発行していただける由、家族共々大変喜んでおります。

そこで、(旧姓石田)忠篤殿との出会いから、38歳の若さで無念の病死をするまでの、教職16年間、結婚生活14年2ヶ月、をかいつまんでここに記したいと思います。

私と忠篤殿が出会いましたのは、ここ長野小諸市にある小諸商業高校(通称小商)でした。忠篤殿は定時制、私は全日制勤務でしたので、普段はほとんど顔を合わせることはありませんでした。ただ、週2時間は全日制生徒を教えていたためか、事務室などでみかけることがありました。今から思うと、私の方は石の上にも3年目となり職場事情にも慣れて、多少の余裕と好奇の目で、新人忠篤殿を見ていたかもしれません。

当時職場では、30歳未満の者が青年部なるものを結成し、時々町へも繰り出したり、冬にはスキー教室を開きなどの活動で、気分転換と明日への活力作りを行っていました。

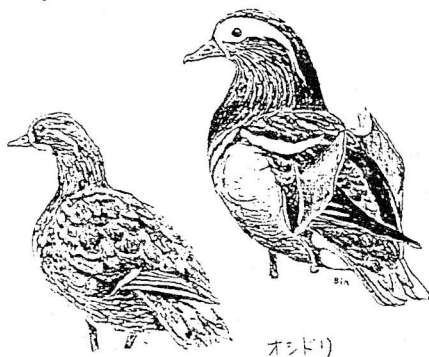
忠篤殿は新潟県の雪深き安塚町生まれ、山スキーにかけては玄人はだ。かたや私は、小諸生まれの小諸育ちでありながら、スキーをする機会に恵まれず全くの素人。忠篤殿に1から習い、徐々にではありますが少しは滑れるようになったというわけで、いってみれば、スキーが取り持った縁でありました。

忠篤殿にしてみれば、結婚なんてまだ早いと思っていただろうに、私の方が世間でいう適齢期。忠篤殿の優しさと思いやり…まさに救済事業ってところでしたでしょう。これは、ほんとにそう思う。忠篤殿と出会わなかったら、恐らくいまだに一人者だったと思うくらいです。

こうして昭和51年春3月。すべては忠篤殿のプランで、富士7合目へ二人で登り、新生活をスタートしたわけです。

忠篤殿は小商を後にし、作久市野沢南高校へと異動。男子バレー部監督として、生涯をかけたともいえる情熱を注ぐことになります。バレー競技との出会いは、幼年の頃より、長兄、次兄からの影響が多大でありました。バレーと向き合っている間はそれこそ人が変わったみたいに、つまり別人のようだと言ってよいほどの心血を注いでおりました。それが、後に何回かの病魔との戦いのエネルギー源ともなったように思われます。

朝練と放課後の練習が毎日続く中、昭和53年8月25日夕、突然意識を失くし救急車で入院。忠篤殿26歳の時です。その時私は最初の妊娠で6ヶ月目に入っていました。意識不明の原因は良性脳腫瘍、簡単に言うと脳腫瘍に因るものでした。その年11月4日手術。私の出産は12月20日でした。大変な事が続いた年でありましたが、翌、新年は夫の術後も良好で職場復帰がかない、長女の誕生と、明るい年を迎えることができました。



オシドリ

夫は相変わらず熱心な指導に明け暮れ、家庭の方は術後2年半近くして長男誕生とさらに賑やかになり、平穏無事な日々が過ぎておりました。

昭和57年4月、忠篤殿は二度目の異動。上田市、上田高校へ赴任。やはり男子バレー部の監督として、日曜日無し、夏休みもほとんど部活指導と補修授業につぶれるといった日々。それも義務感からではない為、いつでもよい汗をかき、よい顔をしておりました。家に帰ってからの、一杯のビールをおいしそうに飲み干す顔は、決して忘れられません。

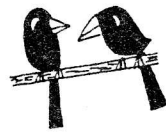
こうした中であっても先の頭部手術のことは決して忘れていたわけではありませんでした。定期的な検査、服薬など怠るようなことなどなく、真面目で、几帳面な人でした。それにも関わらず、何と神は酷いことをなさるのでしょう。

この頃より、背中を反り返すような素振りを度々見掛けるようになりました。毎日運動とは縁の切れない生活をしていましたから、筋肉痛かあるいは関節痛かと本人も私も思っていました。

昭和59年9月、思いもよらぬ肝臓疾患であることを知らされました。皮肉にも私の方は、これより2ヶ月位前、切望した3人目の妊娠を知り、束の間、大喜びをした後のことでした。医師からはその時、夫の前で、血管腫と聞かされていましたが、後、必然的に悪性腫瘍と知ることになります。

小諸市内某病院の紹介で、都内中央区国立がんセンター病院で即刻大手術となりました。翌60年8月には2回目の手術。この年4月、次女を出産したのですが、この出産は考えに考え抜いた末の結論でした。今から思うと、わが家に幸せを運んでくれた神の子であると言っても過言ではないかもしれません。忠篤殿33歳、私35歳の時のことでした。

このような峠ともいうべき年を越し、忠篤殿は又職場復帰を果たし、バレー部にも再び情熱を注ぐ日々となりました。肝臓の2回目手術より1年後、上田高校男子バレー部は県代表とな



り、北信越大会出場権を獲得しました。その大会では、初戦突破、惜しくも2回戦で敗退とはなったものの、これはもう大満足だったに違いありません。くしくも会場は、忠篤殿の故郷、高田リージョンプラザでありました。

これを境に、気力の上ではなんら遜色ないものの、体調には少しずつ弱りが見られるようになっていき、1年のうち療養期間の方が長くなる傾向にはありました。けれども愚痴めいた事など一言言うわけではなく、常に周りの人の事を思いやる、温かく、影響力の大きな人でした。

世の年号も変わり、忠篤殿は、平成2年6月18日、ついに帰らぬ人となりました。38歳でした。最後は私一人に見取られて。

先に申し上げましたとおり、今年は亡くなって早6年。毎年8月15日には欠かさず、10名前後の上田高校男子バレー部のOBの皆さんが墓参りに来てくれ、近況報告、結婚報告などをしていってくれます。

夫の人生は短くはありましたが、濃縮した、この上ないかけがえのない人生でありました。我家の子達も、高3、高1、小5となり、元氣だけが取柄の子供に成長してくれました。

今年は山梨県清里で行われた15期会に、小5の次女と初めて参加させていただき、二日目には小諸の忠篤殿の墓参りを参加者全員でしていただきました。ありがたく、言葉に言い表せないほど感謝致しました。

以上、生来文才の全く無い私ですが、事実にできるだけ忠実に書いたつもりでいます。今後とも15期会の皆様をはじめ、ワンゲル部の方々には何かとお世話になることと思いますが、よろしく願い申し上げます。

11月11日 記

猶、男子バレー部OBの方々の”追悼文集”の中から1編を掲載していただきます。30名の方から一つ選び出すのは非常に苦慮しましたが、わか家の子等と同様に、お父さんと死別（小学1年時）死別された経験をお持ちの方のものとしました。

用同上いづー比田井先生の思い出ー

より

58年度卒 寺西 浩一

比田井先生と初めて知り合ったのはもう9年前になります。野沢南高校から上田高校に転勤され、そしてバレー部顧問として私達を指導して下さいました。

今、目を閉じて先生を想い浮かべてみますと、汗をかきながらジャージ姿でボールを打っておられる真剣な姿が思い出されます。あれ程お元気でいらしゃった先生が…非常に残念でなりません。

先生には時として怒られもしましたし、はたかれもしました。全てに情熱を持ってぶつかってきた下さいました。言われたから、怖いから従うのではなく、先生を見ていると自然とやらなければ…という気持ちにかられたから不思議です。

その中でバレーボールを通して、人生で大切な二つのことを教えて頂きました。

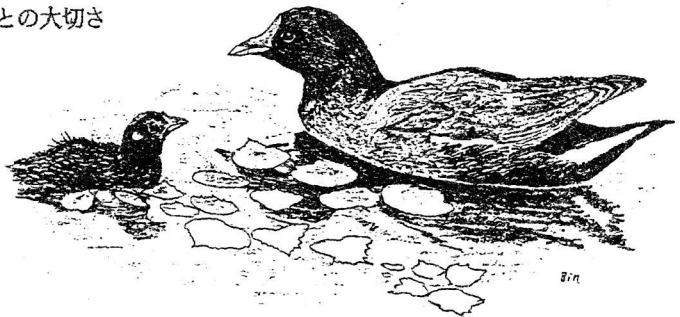
- 1) 感動することの大切さ
- 2) 苦しいことを乗り越えることができる、
体力・精神力をつけることの大切さ

感動する心というものは何事にも換え難いものです。感動する為には、努力が必要です。努力なしでは感動は有りえないのです。努力して努力して、それでも駄目ならさらに努力して、そして最後に望みをかなえる。しかし、この為には、苦しいトレーニングに堪え、目標に向かって努力しなければなりません。

先生は、私達と一緒に苦しんで、努力して下さいました。今でも、県大会で負けた時の、先生の悔し涙を忘れることはできません。

私事になりますが、私は小学校1年の時、父親と死別しました。それからは寝たきりの祖母、母親と姉と私の4人の生活が始まりました。あれから18年経ちましたが、その間何度も苦しいこと、悲しいことがありました。母に我儘をいく度となく言い、困らせ、辛い思いをさせました。苦勞をかけました。その事を思い出す度にいつも涙が出てきます。子供の為に自分の人生の全てをかけてくれて、本当に感謝しています。

どうか家族全員が力を合わせて、頑張ってほしいです。お母さんを助けて、盛り上げて欲しいです。父親がいないというハンディに負けることなく、力強く生きて欲しいです。苦しいこと、悲しいことは数多くありますが、それらを乗り越えて行って欲しいです。それがきっとお父さんの願いだと思います。



OB会会計報告

(平成 8年 7月 1日～平成 8年11月30日)

会計 23期 鳥越

《 収 入 の 部 》

OB会費納入	253,000
小屋作業寄付	15,000
預金利息	1,132
計	269,132

《 支 出 の 部 》

OB会報 (やまざと) No.5制作費	45,654
〃 郵送料	114,080
〃 人足代	2,800
平成8年度小屋作業援助金	50,000
小屋作業食費、備品代	28,950
〃 その他雑費	6,300
3期田村氏小屋番補助金	24,100
OB・現役 (3年) 懇親会	78,383
事務局連絡費	7,900
文具費その他	13,657
計	371,824

《 差 引 剰 余 金 》

前回 (8.6.30現在) 繰越金	1,650,147
収 入 の 部	269,132
支 出 の 部	371,824
差 引 合 計	1,547,455

以 上



477口